わたしの古典 22

岩橋邦枝の 誹風柳多留

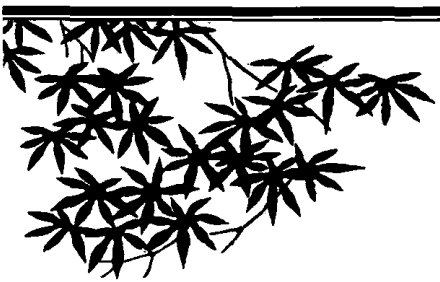
集英社

わたしの古典 22

岩橋邦枝の

誹風柳多留

集英社



わたしの古典 22

岩橋邦枝の誹風柳多留

一九八七年一月二五日　第一刷発行

著者――岩橋邦枝
編集――株式会社創美社
発行者――堀内末男
発行所――株式会社集英社
101 東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
電話：出版部(〇三)二二三八―二八二一
：販売部(〇三)二二三〇―六一七一
：製作課(〇三)二二三八―二九六四
印刷所――凸版印刷株式会社
製本所――中央精版印刷株式会社

©1987 Kunie Iwahashi. Printed in Japan ISBN4-08-163022-4 C1393

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社製作課宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。
本書の無断複写・複製・転載を禁じます。

わたしと『誹風柳多留』

『誹風柳多留』は、いつの世にもだれにでも親しめる人間味溢れる川柳集である。軽妙卑俗な五・七・五の十七音の世界に、江戸のあらゆる階層にわたる老若男女の生態、暮らしぶりが、日常のすみずみまで活写されている。と同時に、昔もいまも変わらぬ人間心理の機微や庶民感情、関心のあり方、観察眼などが、川柳の特質のうがちとおかしみのなかから生き生きとつたわってくる。歴史書による知識では味わえない人間的興味で私たちをたのしませてくれて、江戸の人びととの間に二百年余の隔たりがあるとも思われないほど身近な親しみが湧く。それを味わうにはまず、じっさいに『誹風柳多留』の句にふれてみることである。敬遠していたのでは、面白さもわからない。じつは私も、学生時代には敬遠派の一人だった。だが、熱心な友人に手引きされて句を拾い読みするうちに、作者たちや編者呉陵軒可有にも関心が生じ、句の作者を想像してみたり作者といっしょにあそびながら読んだりするたのしみをおぼえた。『誹風柳多留』と限らないが、知ることで興味も深まる。本書であつかえなかったほかの句もぜひ読んで、多くの人に江戸古川柳の豊かな世界を味わっていただきたいとねがっている。

本書に抜粋した句は、読みやすくするために、次のように表記を改変したことをおことわ

りしておく。まず、原作に用いられている漢字・仮名の字体は現行の字体に改めた。漢字を仮名に、仮名を漢字に置きかえた箇所もある。また、漢字には適宜振り仮名をつけ、送り仮名を施した。漢字の右下にふった片仮名、いわゆる「捨て仮名」は平仮名に改めた。仮名づかいは歴史的仮名づかいに統一した。

句の抜粋および句の解釈と注釈は、主として次の書物を参考にしながらおこなった。

岩波文庫『誹風柳多留』全五冊（山沢英雄校訂）
岩波書店「日本古典文学大系」『川柳狂歌集』（杉本長重・濱田義一郎校注）
新潮社「新潮日本古典集成」『誹風柳多留』（宮田正信校注）
教育社『川柳・狂歌』（濱田義一郎著）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

わたしと『誹風柳多留』……1
序章……9
第一章 家族……15
子供……16
娘ごころ……27
恋と縁結び……34
道楽息子……40
夫婦百景(一)——おふくろよりもじやまなもの……50
夫婦百景(二)——花嫁・入聟・古女房……59
姑・新世帯・一人者……74

第二章 川柳のうがち……83
写生句の魅力……84
歴史とパロディ……94
江戸生まれの誇りと自負……108
男と女の世界……116
人情の裏表……126
第三章 職業……135
奉公人の四季(一)――下女の恋……136
奉公人の四季(二)――盆と正月の「藪入り」……149
商売さまざま……158
羽織と法衣……173

武士と役人……184
遊里の泣き笑い……196
吉原と岡場所……208

第四章 日常生活……217
縁起をかつぐ……218
庶民の歳時記……232
人情往来江戸暮らし……248

解説――坂内泰子……261
初句索引……269
章扉イラスト――穂積和夫
装幀――菊地信義
写真提供・協力――厳島神社・(株)紫紅社・出光美術館

岩橋邦枝の誹風柳多留

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

序章

川柳は、十八世紀後半の江戸ではじまった庶民文芸である。

『誹風柳多留　全』と題した斬新な句集が、明和二年（一七六五）、江戸で出版された。この句集は非常な人気をよび、題を『全』から『初篇』と改めて、続篇が以後数十年にわたってつぎつぎに刊行されていく。川柳という新しい文芸ジャンルの誕生だった。

『誹風柳多留』（以下『柳多留』と略）の中から、現代の私たちにもなじみ深い一句をまず挙げてみよう。

孝行のしたい時分に親はなし

いまでは格言で通用するほど、日本人の生活にとけこんだ句になっている。またたとえば、俗によく使われる〝目も口ほどにものを言い〟〝川の字に寝る〟〝知らぬは亭主ばかりなり〟なども、出典は『柳多留』や同じ江戸生まれの川柳集である。

こうして垣間見ただけでもうかがえるとおり、『柳多留』にはじまった川柳には、時代の移り変わりを越えて万人の共感や笑いをさそう人間臭さが横溢している。

『柳多留』成立に関わった人物たちについてあらかじめ知っておくほうが、私自身の経験からしてもいっそう親しみやすく面白く読めるし、川柳発生の事情もおのずとわかるので、時代背景とあわせながら人物紹介をして序にかえたいと思う。

『柳多留』は、前句付の点者（選者）柄井川柳が、多数の応募句から選んだ勝句の句集、つまり柄井川柳評の入選句集である。

「前句付」というのは、点者が前句を出題して、各人がそれに五・七・五の句を付ける。もともとは俳諧の連句の練習法の一つで、初心者向けにおこなわれていたが、その手軽さが一般の人にうけて、前句付は元禄の頃から二句立の簡易俳諧として盛んになる。前句も、正式な俳諧からはなれて〝運のよいこと運のよいこと〟〝じやまになりけりじやまになりけり〟というふうに簡略化し、五・七・五の付句一句の趣向をもっぱら競い合うようになった。そして、江戸を中心に、前句付は「万句合」の名でよばれるほどに流行するにいたった。柄井川柳のように評判の高い点者の場合、文字どおり万単位にのぼる応募句が、月三回の万句合興行のたびに彼のもとへとどいた。

万句合で選ばれた勝句には、賞品が出た。その褒美取りが流行に拍車をかけたことに加えて、私の推測するところ、取次所の「組連」の名で勝句を披露する作者匿名の発表形式も、投句家の層と数をひろげた要因だろう。

匿名なので作者の性別も不明だが、『柳多留』の中には、どう見ても女、ことに女房ならではの観察眼や心理の表れた句がまじっていて興味深い。勝句で発表されても匿名、おまけに賞品をもらえるとあって、亭主や姑の下でストレス解消にこっそり投句する女の常連もいたのではなかろうか。公言できない本音を、句作にたくす武士や町人もいたにちがいな

い。一句一句から、作者の身分や暮らしぶりに想像をそそられる。こうした匿名のあまたの作者たちが『柳多留』に句をつらね、川柳文芸の草わけ的存在となった。

柄井川柳が、名主の公職をつとめるかたわら、四十歳で点者になってから亡くなるまで、三十三年間に選評した句は、二百三十万句をこえるという。それだけの句を寄せた人びとの数にも驚かされるが、点者川柳のはたらきもすごい。よほど勤勉でタフな人だったのだろう。彼は、選評眼のすぐれた公平な点者として、信望があった。しかし何といっても彼の人気を決定づけたのは、『柳多留』の刊行だった。

『柳多留』は柄井川柳評の勝句集、と私ははじめに紹介したが、より正確には、呉陵軒可有（ごりょうけんべし）が川柳評の勝句を精選して企画編集した句集である。

呉陵軒は、川柳評の万句合の勝句の中からさらに選んで『柳多留』を編むにあたり、「一句にて句意のわかり安（やす）きを挙（あげ）て」（初篇序文）前句をすべて省くという画期的な試みをおこなった。従来の前句付集のかたちをがらっと変えて、付句だけを独立句として並べた。すなわち私たちがいま、川柳と呼んでいる句のかたちだが、これは当時としては常識やぶりで、呉陵軒以外のだれも考えつかなかった新企画だった。

『柳多留』が世に出ると、柄井川柳の万句合興行の応募句は飛躍的に伸びた。斬新な句集の面白さが、江戸の人びとから大歓迎されたのである。川柳は名実ともに江戸いちばんの点者になり、そればかりか一つの文芸ジャンルに後世まで名をとどめることになった。編者呉陵

軒可有の功は大きい。日本独特の川柳文芸の開祖とも言うべき彼は、『柳多留』の初篇から二十二篇まで編んで、亡くなった。

呉陵軒は、編者として非凡だっただけでなく、木綿と号して一流の作者でもあった。作者名が例外的に多くわかっている安永二年（一七七三）の柄井川柳評万句合では、勝句八十八で彼がトップ入選者。呉陵軒と木綿、二つの雅号の由来と、句作の実力、そして彼の好ましい人柄をつたえてくれる文を、次に紹介しておこう。雨譚という人がしるした『柳多留』二十篇（この篇だけ、編者は雨譚）の序文である。

「昔々三十年も昔より、開き毎に上名護屋（毎回の勝句披露で賞品に出る上等な名古屋木綿）をはづさず、おのづから名にしおひたる翁あり。連中いかつてこごとをいへば、ごりやうけんごりやうけんとわびて笑ふ」

木綿の号から憶測して呉服屋の旦那だったとみる説もあるが、やはり勝句賞品の木綿にちなんだ雅号とみるほうが彼にふさわしいように思われる。ざんねんなことに伝記資料が乏しいので想像で補うしかないが、呉陵軒の才能といい人柄といい、たいへん魅力的な人物として私は関心をひかれる。

『柳多留』の句の配列は、年代順ではない。しかしアトランダムに並べてあるのではなく、そこには当然編者の意図と工夫がはたらいているはずだが、その点を重視して、俳諧の連句の付合に似た句移りの妙を指摘した宮田正信氏（「新潮日本古典集成」『誹風柳多留』校注者）の

考察は興味深い。『柳多留』を通読すると、たしかに連句ふうに句から句へ微妙につながっていく面白さがある。読者それぞれが、句移りを自分なりのイメージで連鎖させながら全篇読みすすめてみるのもたのしい試みだろう。

編者の呉陵軒が、前句を省いて独立句にするさい添削改作した句も、『柳多留』の中には少なくない。とり上げた句のいくつかには、その右横の（）内に原作のかたちを示したので、彼の手直しによって、句がどのように変わったかを味わっていただきたい。

呉陵軒が亡くなって二年後に柄井川柳も世を去ったあと、『柳多留』は二代目川柳以後の後継者たちによって百六十七篇まで刊行されたが、しだいにマンネリズムに陥った。

江戸川柳の真髄は、初代川柳評の二十四篇までにある。そのすべてをここでとりあげることは不可能なので、本書は『柳多留』初篇から二十四篇までを中心に、素材別に抜粋して見ていきたい。ちなみに初篇は七百五十六句、二十四篇までの総句数は一万七千五百六十七句。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com